



後藤 桃水
(多田龍吉氏提供)

松島の サーヨー
瑞巖寺ほどの
寺もない トーエー
アレワエーエー エント ソーリヤー
大漁だエ

みなさんはこの唄を知っていますか。

この唄は「斎太郎節」という宮城県の「民謡」の一節です。民謡とはその土地の生活の唄です。「斎太郎節」は松島湾の漁師が大漁のときに歌った唄で、後藤桃水が「大漁唄込み」としてまとめ、全国的に有名になりました。桃水は郷土に伝わる唄を掘り起こし、唄い手を育てました。また、初めて民謡と名のついた大会を開き、民謡を広める活動をしました。その功績をたたえ、「民謡育ての親」と呼ばれています。

桃水は明治十三（一八八〇）年、桃生郡大塚濱（現在の東松島市大塚）に生まれました。父は野蒜村の村長を務めるなど、由緒正しい家の長男として生まれました。きびしい父の教えもあり、桃水は幼いころから勉強にはげみました。小学校の時は歌うことが苦手で、音楽に興味はありませんでした。

中学校に進学したある日、温泉旅館で虚無僧が奏でる尺八の音色を聴きました。風の音のような心地よさ、底から響くような低音。桃水はすっかり聴き入ってしまいました。そこで桃水は中学校の勉強をしながら、尺

八で有名な先生に弟子入りし、練習を始めました。

桃水は第二高等学校（現在の東北大学）に進学し、父が希望する医学部に入りました。ところが、このころの桃水は医学の勉強ではなく尺八の練習に没頭し、日本全国にある有名な曲を演奏できるまでになっていました。そこで、桃水は尺八を本格的に勉強するため高等学校をやめ、東京に行くことにしました。

父は桃水に医者道を志してほしいという願いをもっていましたので、桃水が唄の道に進むことに猛反対しました。そしてとうとう、桃水を家から追い出してしまいました。その一方で、桃水の尺八の腕はめきめき上達し、弟子を持つまでになりました。また、尺八の練習をするうちに郷土に伝わる唄に興味をもつようになりました。しかし、当時、このような唄は「百姓唄」、「田舎唄」といわれ、その土地に住む人以外はだれも知りませんでした。

「日本にはふるさとの風景やそこに住む人の思いを歌ったすばらしい唄がまだたくさんあるはずだ。」
と思い、日本の各地を歩いて回ることにしました。

桃水は人里離れた山村や海辺の町もくまなく歩きました。食事也十分にとらず、ひげものびぼうだい。はいていた草履はやぶけ、足も血だらけ。そんな桃水の様子を見て逃げ出す人もいました。それでも、一軒、一軒立ちよっては声をかけ、唄にこめられた意味や背景まで熱心に調べました。桃水の情熱に町や村の人々も心を動かされ、いろいろな唄を調べたり、唄い手を紹介したりしてくれるようになりました。桃水は村の人たちと話していくうちに

「みんなが唄を口ずさみながら楽しそうに勉強したり、仕事をしたりしている。なぜだろう……。」
と思うようになりました。

桃水は東京にもどり、ふるさとの唄のよさを知ってもらうために大会を開くことを考えました。しかし、「百

功績…
世の中のために
なす、すぐれた働き。

虚無僧…
尺八を吹きながら、
諸国を修行して歩
く僧。

尺八…
日本の木管楽器の
一種長さが一尺八
寸（約五十四センチ）
であることに
由来する。竹の根
元でできている。
歌口に息を吹き付
けて音を出す。

姓唄」「田舎唄」大会では人は集まってはきません。そこで、何かいい名前はないかと考えました。そのとき、うら庭からセミの鳴き声が聞こえてきました。「ミンヨウミンヨウ」というセミの鳴き声を聞き、桃水はひらめきました。

「そうだ、民の謡だ。民謡だ。」

大正九（一九二〇）年、東京で一回目の「全国民謡大会」が盛大に開催されました。この大会には三千人もの人々が集まったことから、全国に「民謡」の名が広まる契機となりました。桃水は「日本民謡道場」の看板をかかげ、さらに弟子の育成にも力を入れました。

関東大震災で桃水の住居も大きな被害を受けたことから、ふるさと大塚に移り住むことにしました。これを機に、東北に伝わる民謡の開拓と民謡の唄い手の育成にさらに力を入れました。その中でも、自分のふるさと唄「斎太郎節」の練習は厳しいものでした。

ある日の練習で弟子が「斎太郎節」を歌い終わったとき、桃水はふと、ある村を訪れた時の情景が目に浮かんできました。これまで見たことのない山と海の風景。右手にはきれいに紅葉した山、左手にはいろいろな表情を見せる海の波の動き……。

しばらくして重い口を開きました。

「君は松島のことを知っているのか。私についてきなさい。」

桃水と弟子は大塚の道場を出て、海に向かって歩きました。着いたのは松島湾が一望できる岬でした。

「ここで歌ってみなさい。」

弟子は（何でだろう）と思いましたが、しばらく海を見つめると、はっと何



松島の風景

かに気付いたのです。そして、心をこめて歌い始めました。桃水はその歌声をだまって聴いていました。

日本は終戦を迎え、国民は戦争に負け、希望を失っていました。桃水はこのようなときこそ、民謡を通じて国民に喜びと希望を与えようと考えました。「NHKのど自慢大会」では弟子が入賞するようになり、このとき唄った「さんさ時雨」、「大漁唄込み」は現在でも多くの人々に愛され、歌い継がれています。人々はふるさとを思う民謡のよさを知り、あらゆる場で民謡を唄うようになりました。民謡は確実に人々の心に浸透していったのです。

さらに、仙台の公会堂において「日本全国民謡大会」が開催され、東北は民謡の宝庫であることが全国に知られたることになりました。

民謡で日本国民を元気にしたい、ふるさとのよさを伝えたいという願いを持ち続けた桃水は八十歳でその生涯を閉じました。桃水の功績をたたえ、昭和二十四（一九四九）年、ふるさとの大塚には民謡碑が建てられ、今も語り継がれています。



大塚（東松島市）に建てられた民謡碑

後藤 桃水

後藤 桃水は、明治十三（一八八〇）年、桃生郡大塚濱（現在の東松島市）で生まれた。本名は正三郎で、若いころから尺八の演奏に関心をもち、修行に励んだ。日本各地の郷土に伝わる唄を掘り起こし、唄い手を育てた。桃水の作品の中では、「野蒜甚句」の作詞、作曲、「八戸小唄」の作曲、「大漁歌い込み」の創作などが有名。桃水の暮らした大塚には、現在も民謡碑が残されている。

契機：
きっかけ。

関東大震災：
大正十二（一九二
三）年九月一日
十一時五十八分こ
ろ関東地方で起
こった大地震。